

や わた はら い せき
八 幡 原 遺 跡

事務所兼住宅建設に先立つ
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年 3月

長野県飯田市教育委員会

八幡原遺跡

事務所兼住宅建設に先立つ
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

序

近年の考古学ブームはといわれるなかで様々な調査・報告がなされていますが、考えてみればそれだけ地域における開発等が進んでいることの裏返しだと思います。

飯田市においても公共事業や民間開発に伴う発掘調査が増大しており、先人たちの生活の様子を示す事実をつぎつぎと確認しております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが地域の歴史再構築に大きな役割を果たすといえます。

今回発掘調査した八幡原遺跡は、民間の開発に伴うもので市立病院建設予定地の東側、国道153号飯田バイパスの脇に当たります。バイパス建設に伴う発掘調査で確認できた方形周溝墓群の一部およびその東端に位置する妙見山古墳の調査となったわけです。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査といえども文化遺産の破壊にちがいないのです。できることならば、今までそうだったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だと感じています。しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。地域社会の発展と文化財保護がうまく調和がとれた地域にすることがこれから的重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深い理解をいただいた宮下建築設計事務所の皆様と、酷寒の中での発掘作業や、細かい整理作業に従事していただいた作業員の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成4年3月

飯田市教育長

小林 恭之助

例　　言

1. 本書は宮下建築設計事務所の事務所兼住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地八幡原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は宮下建築設計事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成2年12月1日～平成3年2月28日まで実施した。整理作業及び報告書の作成作業は平成3年度に実施した。
4. 発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号をYHH1403-1とした。なお、妙見山古墳についてはMYOKとした。
5. 本書の記載順は、造構ごと記述した。記述順序は方形周溝墓、豎穴、溝址、その他造構、および古墳とした。
6. 造構番号については、隣接地で平行して調査を実施した一般国道153号飯田バイパス用地内で検出された造構番号と連続して用いた。
7. 本書に記載した標高の単位はmである。
8. 本書の記載は、造構図を本文に併せて挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
9. 本書は佐合英治、吉川豊、馬場保之、渋谷恵美子の分担執筆し、それぞれの分担を文末に記した。なお、本文については一部小林正春が加筆・訂正を行なった。
10. 本書の編集は、調査員全員で協議により行ない、小林正春が総括した。
11. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序

例言

目次

I 経過	1
1. 発掘に至るまでの経過	1
2. 発掘調査の経過	1
3. 整理作業の経過	1
4. 調査組織	2
II 遺跡の環境	3
1. 自然環境	3
2. 歴史環境と周辺遺跡	3
III 調査結果	9
八幡原遺跡	9
1 方形周溝墓	9
方形周溝墓19	9
方形周溝墓20	10
方形周溝墓21	10
方形周溝墓22	10
方形周溝墓23	14
方形周溝墓24	17
2 竪穴	19
竪穴2	19
竪穴3	19
竪穴4	20
3 溝址	20
溝址9	20
溝址11	20
4 その他遺構	21
1) 集石	21
集石2・3	21
2) 柱穴群	21

5 造構外出土遺物	23
妙見山古墳	25
1 墳丘及び周溝	25
2 盛土	25
3 主体部	28
4 築造時期	28
IV まとめ	29
V 引用参考文献	31

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	5
挿図 2 調査位置図および周辺地図	6
挿図 3 八幡原遺跡遺構分布図	7
挿図 4 方形周溝墓19	9
挿図 5 方形周溝墓20	11
挿図 6 方形周溝墓21	12
挿図 7 方形周溝墓22	13
挿図 8 方形周溝墓23	14
挿図 9 方形周溝墓24	15
挿図10 方形周溝墓24主体部	17
挿図11 壁穴 2、3、4	18
挿図12 溝址 9	19
挿図13 溝址11	20
挿図14 集石 2・3	21
挿図15 柱穴群（その1）	22
挿図16 妙見山古墳位置図、発掘箇所及び妙見山古墳	26
挿図17 妙見山古墳主体部	27

付 図 目 次

付図 妙見山古墳墳丘土層図

図 版 目 次

第1図	方形周溝墓20・22、竪穴2・4、集石3出土遺物	35
第2図	妙見山古墳出土遺物	36
第3図	造構外出土遺物	37

写 真 図 版

図版1	方形周溝墓全景、方形周溝墓19、方形周溝墓20	41
図版2	方形周溝墓22、方形周溝墓23、方形周溝墓24（主体部）	42
図版3	竪穴2、集石3	43
図版4	妙見山古墳全景、盛土の様子	44
図版5	妙見山古墳主体部	45
図版6	方形周溝墓20・22、竪穴2・4、集石3、造構外出土遺物	46
図版7	妙見山古墳盛土及び周溝出土遺物	47
図版8	作業風景	48

I 経 過

1. 発掘に至るまでの経過

平成2年秋に宮下建築設計事務所が一般国道153号飯田バイパス予定地の東側で、事務所兼住宅の建設を進めるとの計画が示され、開発計画はバイパスができる後に造成を始め建物を建てるものであった。しかし、当該地は一般国道153号飯田バイパス3工区の埋蔵文化財発掘調査を平成2年度に実施しており、バイパスの建設がなされると、発掘調査実施に様々な支障が生ずることが懸念され、バイパスの調査実施に合わせて現地調査を行なうことがよいのではないかと判断された。

建設計画地は埋蔵文化財包蔵地八幡原遺跡として登録されているうえに、東端には妙見山古墳が所在しており、先行して実施しているバイパス建設に先立つ発掘調査において確認された方形周溝墓群に関連する遺構の存在も考えられるため、宮下建築設計事務所および長野県教育委員会文化課、飯田市教育委員会それぞれの担当職員により現地協議を行なった。その結果、バイパスに伴う発掘調査と平行して発掘調査を実施することになった。

2. 発掘調査の経過

12月1日より現地協議の結果に基づき、開発予定地の発掘調査にかかった。

まず、重機により表土及び木材の排除を行ない、つづいて、作業員による平坦部分の検出から作業を開始した。その結果、方形周溝墓5基を確認し、隣地からつながる方形周溝墓群の一画であることがわかった。なお、測点については隣接するバイパスの調査区にあわせるものとし、遺構実測は、業者に委託して行なった。

妙見山古墳の調査は、周溝の掘り下げと盛土の断面調査を平行して行なった。この時点で古墳の盛土の下に方形周溝墓が存在していることが確認され、妙見山古墳と方形周溝墓の溝が共有されている可能性が強く、妙見山古墳が方墳であることも判明した。

最終的に現地での調査が終了したのは、2月28日であった。

3. 整理作業の経過

平成3年度になり、報告書の刊行作業を飯田市考古資料館において実施した。

出土遺物の洗浄・注記・復元を実施した。さらに、遺物の実測・写真撮影を行なった。

また、遺構図については、遺構ごとのトレースを行ない、全体図の作成も併せて実施した。特に古墳の土層断面については詳しい図を作るために多少時間がかかった。

出土遺物はあまり多くはないが、実測できた土器および石器はトレースし、写真整理も併せて

実施し、報告書掲載用の図版組みを行なった。原稿は、各調査員が分担し執筆し、報告書の刊行となった。

(吉川)

4. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林 正春

調査員 吉川 豊・佐々木嘉和・佐合 英治・馬場 保之・渋谷恵美子

作業員 市瀬 長年・今村 春一・大島 利男・木下 傳・木下 当一

北村 重実・窪田多久三・坂下やすゑ・清水 三郎・高木 義治

高橋収二郎・滝上 正一・豊橋 宇一・中平 隆雄・福沢トシ子

細田 七郎・正木実重子・松下 成司・松下 真幸・松下 直市

松島 卓夫・森 章・矢沢 博士・吉川 正実

井原 恵子・池田 幸子・大藏 祥子・金井 照子・金子 裕子

唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる・木下 早苗・木下 玲子

柳原 勝子・小池千津子・小平不二子・小平 千枝・渋谷千恵子

田中 恵子・筒井千恵子・丹羽 由美・萩原 弘枝・原沢あゆみ

林 勢紀子・樋本 宣子・平栗 陽子・福沢 育子・福沢 幸子

牧内喜久子・牧内とし子・牧内 八代・松本 恵子・三浦 厚子

南井 規子・宮内真理子・森 信子・森藤美智子・吉川 悅子

吉川紀美子・吉沢まつ美・若林志満子

(2) 事務局

飯田市教育委員会

竹村 隆彦 飯田市教育委員会社会教育課長 (平成2年度)

安野 節 " (平成3年度)

中井 洋一 飯田市教育委員会社会教育課文化係長

小林 正春 飯田市教育委員会社会教育課文化係

吉川 豊 "

馬場 保之 "

渋谷恵美子 "

篠田 恵 "

II 遺跡の環境

1. 自然環境

伊那谷の基本的な地形は、天龍川の流れに沿ったほぼ南北方向への段丘地形を特徴としている。松尾地区と鼎地区が境を接している箇所は、松尾地区の南側を北から南に流れる天龍川により形成された河岸段丘を飯田松川が解析した形になっており、複雑な地形を呈している。鼎地区が位置する河岸段丘はこの飯田松川が形成したものであり、すべての段丘面は西から東に傾斜しながらその幅を徐々に広げている。また、小さな段丘は各所に見られ、東の上部に位置する矢高原や八幡原面もこれら的小段丘にある。

天龍川により形成された段丘崖には北から南に延びている。そして祝詞ヶ洞、祝井沢川等の小河川によりいくつかにわかれ、それぞれに名前が付いている。北から上の城・茶柄山、妙見山、八幡山、代田山と南へつながっている。

八幡原の段丘崖が妙見山と呼ばれるのは、松尾北の原（常盤台）から旧秋葉外道へおりる道の西側の山中に北農神社（妙見神社）があるためである。

八幡原段丘は東西に長さ約600m、南北に幅約200mの三角形であり、まわりの段丘との高低差は、北側で一段低くなる矢高原（北の原）とは15m、東側の一段下である久井地区とは約50mの差があり、南側は一段上になる八幡山との高低差は10mである。

前記のとおり段丘端部に位置するため、自然水利はほとんどなく、わずかに湧水が見られるのは妙見山と八幡山の段丘崖を流れる祝詞ヶ洞のみである。また、南側に段丘崖があるものの日照を妨げるほどの高さではないが、北風や西風をさえぎるものがないため、冬はかなり寒くなる。以上の条件から判断して、生活の場としては不向きであろう。

なお、現在この段丘面では飯田市立病院の建設が進行中である。

（吉川）

2. 歴史環境と周辺遺跡

八幡原およびその周辺においても、先人たちの生活した痕跡がいくつか確認されている。時代順に概観してみる。

旧石器時代の遺物が採取された遺跡としては、八幡原遺跡よりマイクロブレイドの、またその一段下で飯田長姫高校の敷地となっている豊小塙遺跡よりナイフ形石器の出土が知られている。断片的な資料ではあるが八幡原および矢高原一帯にその頃から人々の生活があったと見られる。

縄文時代早期の遺跡は各所より若干量の遺物出土例があるが、不明な点がおおい。

前期としては八幡原遺跡および田井座遺跡において竪穴住居址・集石炉が確認されている。

中期になると日向田遺跡、柳添遺跡、猿小場遺跡において良好な資料が確認できている。

後期・晩期の資料は、遺構に伴う土器の出土がなく、断片的でしかない。遺跡としては六反畠遺跡等がある。

弥生時代は多くの発掘例がある。清水遺跡・田井座遺跡・一色遺跡等で住居址および方形周溝墓を確認している。この時代の生活中心域は、当八幡原段丘面東方及び北方に位置する低位の段丘上にあるといえる。

現存する古墳の数から見れば松尾地区は、座光寺地区・竜丘地区と並んで多い地区である。八幡原には、飯田市立病院建設に先立ち発掘調査した物見塚古墳と今回の調査地点に位置する妙見山古墳の2基の存在が知られている。また、八幡山中には帆立貝型古墳と見られる八幡山古墳が現存している。これらの古墳は崖の縁部に構築されている。また、八幡原の一段下になる北の原には、前方後円墳である御射山獅子塚とその周辺に茶柄山古墳群がある。さらに下段にあたる久井・八幡町には、八幡町公民館の用地内に八幡町古墳があり、発掘調査を実施した。さらに上溝地区には前方後円墳である天神塚・姫塚・おかん塚古墳等をもつ古墳群が広がっている。

これまでに調査した遺跡から判断すれば、これらの古墳を構築した人々は、北側に広がる轟地区の人々よりはむしろ、東側の下段に広がる松尾地区に居住していた人々と考えられる。それを示す集落遺跡としては、城遺跡・寺所遺跡・清水遺跡などがある。その中でも清水遺跡や城遺跡では、古墳時代前期の集落址が確認できた。鼎地区にも古墳時代の集落址はあるが、六反畠遺跡、柳添遺跡、黒河内遺跡であり、これらの古墳からはかなり離れている。

平安時代の集落址として確認できたのは猿小場遺跡がある。この遺跡では25軒の住居址を調査し大規模な集落址であることがわかった。また、日向田遺跡においては、住居址が確認されている。

中世にはいると、田井座遺跡において竪穴造構から常滑焼きの大甕が出土しているが、性格等は不明である。また、猿小場遺跡で確認した建物址は一般の住居というよりも倉庫の可能性が高い。

今回の調査地点の南東側段丘崖には、うっそうとした社叢に囲まれた鳩ヶ嶺八幡宮があり、鎌倉時代の文献によりすでにその存在が明らかである。本尊として奉られている誓田別尊坐像は重要文化財に指定されている。

近世にはいり、城跡として県の史跡に指定されている、信濃守護職である小笠原氏に係わる松尾城跡・鈴岡城跡が南方にある。さらに北の原の東端に「上の城」という地名が残り城跡あるいは居館跡があったとも言われている。

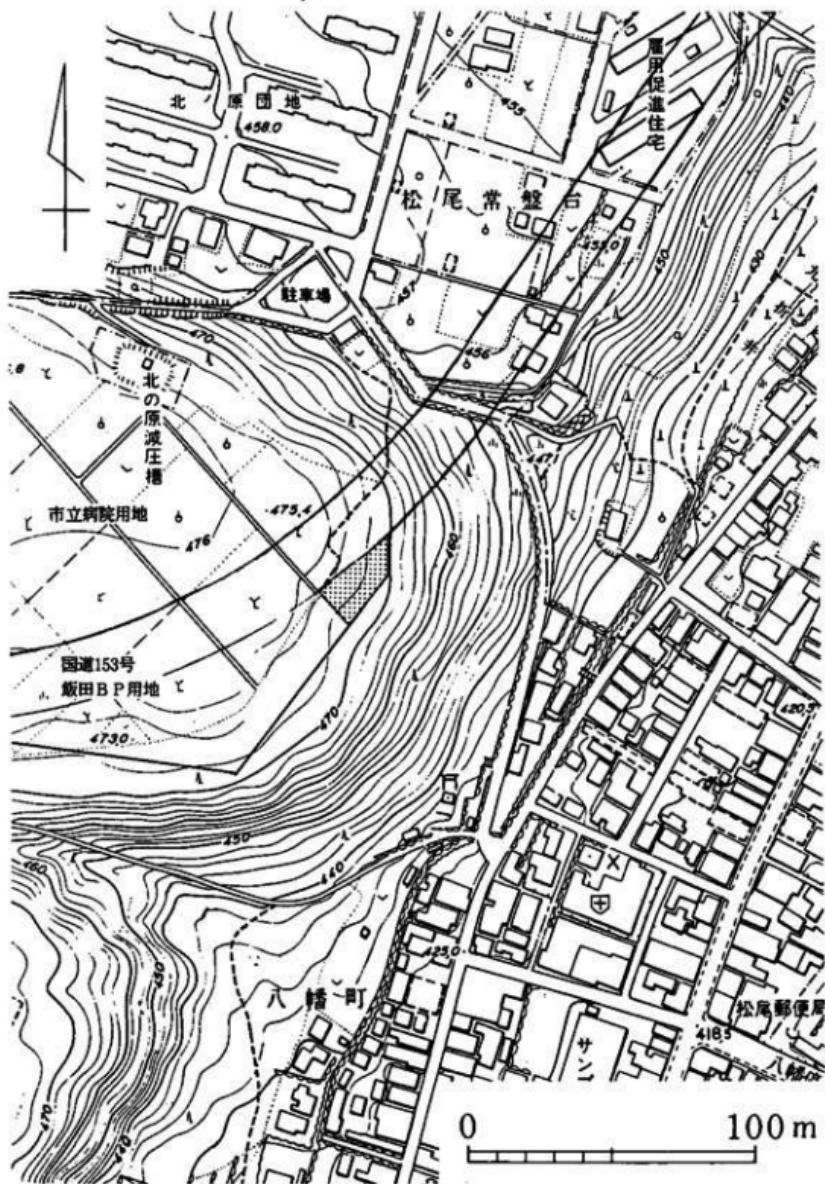
八幡には旧街道が2本通っていた。そのうち一本が秋葉街道、現在の国道152号である。この街道は武田信玄の信州侵略により整備されたものである。もう一本は遠州街道、現在の国道151号であり、中馬道として江戸時代に発達した。この2本の街道の分歧点が鳩ヶ嶺八幡宮の前になり、現在でも道標が立っており、交通の要所であることを示している。

(吉川)

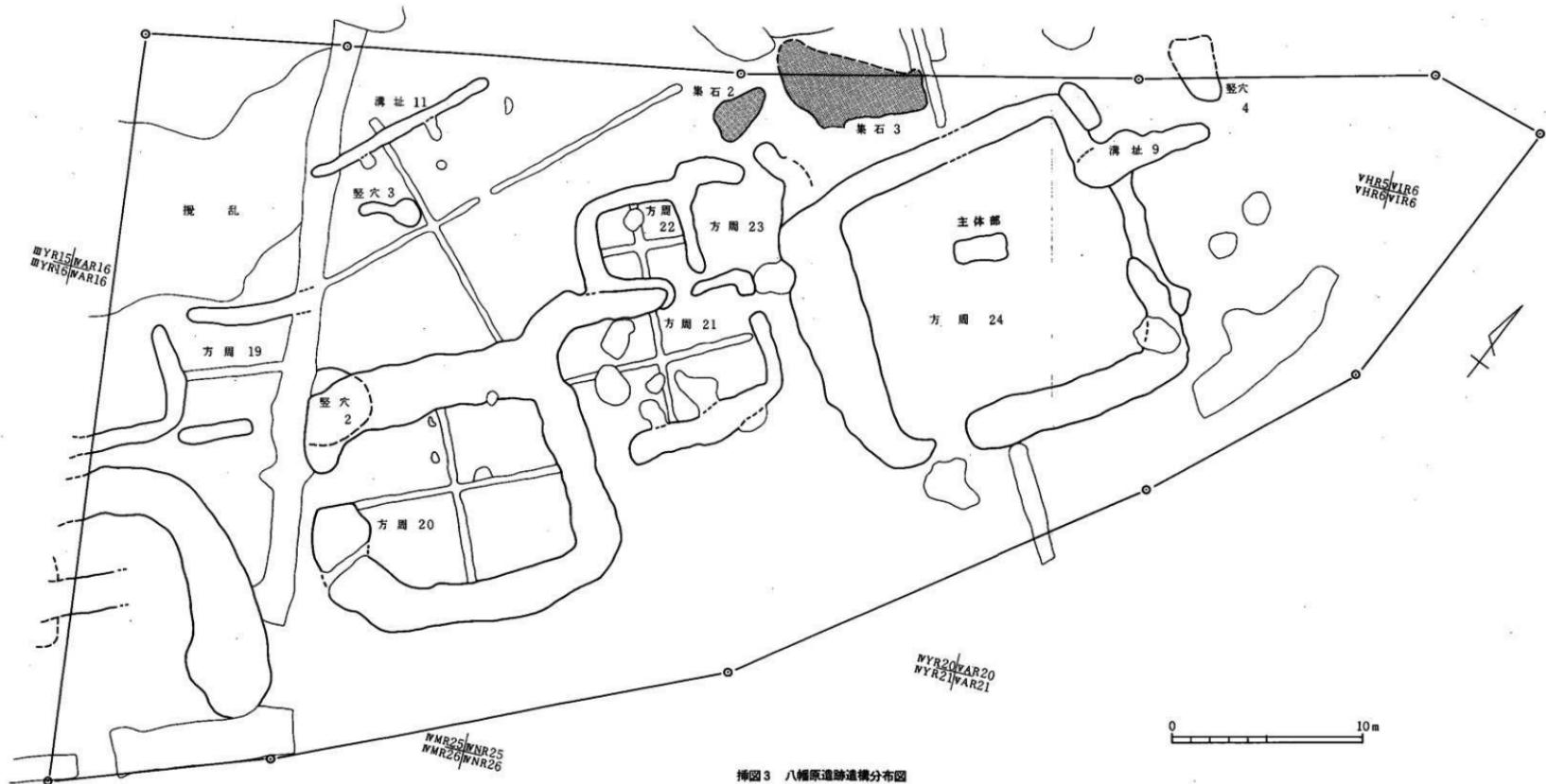


1. 八幡原遺跡 2. 北の原遺跡 3. 猿小場遺跡 4. 地蔵面遺跡
 5. 鹿東平遺跡 6. 代田遺跡 A. 紗見山古墳 B. 物見塚古墳
 C. 御射山石子塚 D. 茶柄山古墳群 E. 八幡町古墳 F. 八幡山古墳

插図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図



擇図2 調査位置図および周辺地図



挿図3 八幡原遺跡遺構分布図

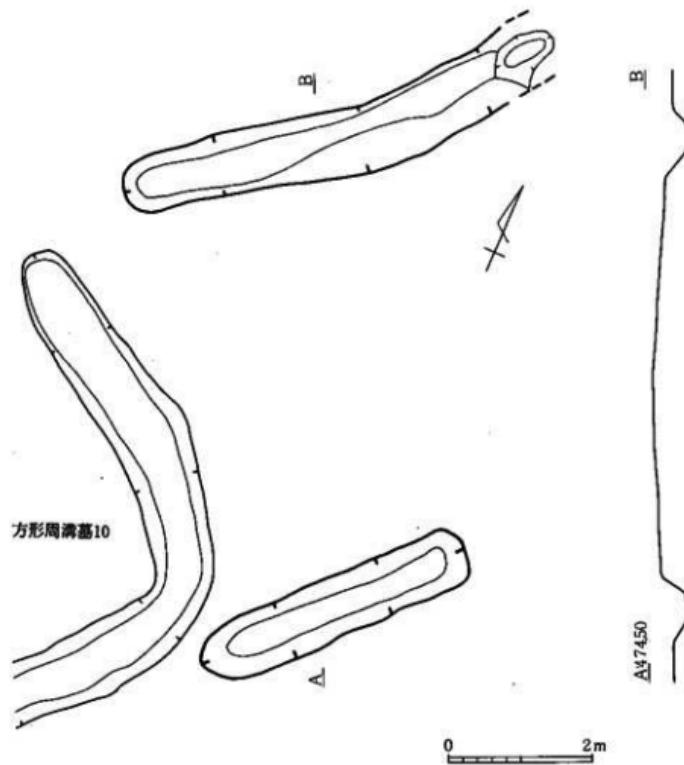
III 調査の結果

八幡原遺跡

1. 方形周溝墓

◇ 方形周溝墓19（挿図4）

調査範囲西端で検出した。南西の周溝は方形周溝墓10と共有している。また、東南の周溝は長さ4m、幅0.8m、深さ20cmである。さらに北西側の周溝も幅1m深さ30cmで比較的緩



挿図4 方形周溝墓19

やかな立上がりの壁をもっている。バイパス試掘時のトレンチにより、北東側が切られてしまつたため一部確認できない箇所もあるが、 7×7 mの正方形に近いものと推測される。

周溝に囲まれた部分の検出では主体部が確認できなかったため、その部分に確認トレンチを入れたがやはりその所在はつかめなかった。

遺物の出土はない。

(馬場)

◇ 方形周溝墓20(拵図5、第1図)

方形周溝墓19の東側で試掘トレンチに周溝を接して検出した。西の角では堅穴2が周溝の上で検出できた。北の角では、方形周溝墓21の周溝と切り合っているが、新旧関係はわからなかった。

南角には松の株があったが、ほぼ完全に調査できた。南西では、周溝が切れており、入口部と考えられる。

規模は 15×14 mの隅丸正方形である。周溝の幅は北側と入り口付近で3m、東側及び南側で2mと比較的広く、深さも最も浅い場所で100cmを測り、深い場所では、180cm前後としっかり掘られている。壁も急角度に立上がり、断面形ではほぼV字になる。

主体部の所在は確認できなかった。

遺物は周溝から出土した打製石斧と横刃形石器、須恵器破片がある。

(佐合)

◇ 方形周溝墓21(拵図6)

方形周溝墓20の北に接して検出した。 11×9 mの長方形である。北西側では周溝墓22の周溝をきっている。北では一部周溝墓23と周溝を共有している。南側は周溝墓20と共有している。周溝は、西側が最も幅が広く2m、深さは50cmある。北側の周溝は幅0.5m、深さ20cmで最も狭く浅い。南側は穴に切られており、本来の周溝ははっきりしないが、幅で2m深さ100cmほどあるものと見られる。

主体部は確認できなかった。

遺物の出土はなかった。

(吉川)

◇ 方形周溝墓22(拵図7、第1図)

方形周溝墓21の北西に周溝を共有して検出された。 7×6 mの比較的正方形に近い長方形を呈した方形周溝墓である。東南の周溝は周溝墓21に切られている。北東の周溝は周溝墓23のものと共有している。周溝の幅はほぼ一定で1m、深さは西角が最も深く50cmを測るが周溝墓の周溝も南から西へ向かってやや傾斜し、その深さは周溝墓21に切られる部分で40cmを測る。周溝墓23と共有する周溝は幅0.8m深さ約30cmである。東角には周溝がなく入り口部分と見られる。主体部は確認トレンチを入れたが、その所在はつかめなかった。

遺物としては周溝から出土した土師器が2点ある。1図6は小型の甕の胴部である。7はてづくねと見られ、甕を模倣したものである。その他に打製石斧が出土している。(吉川)

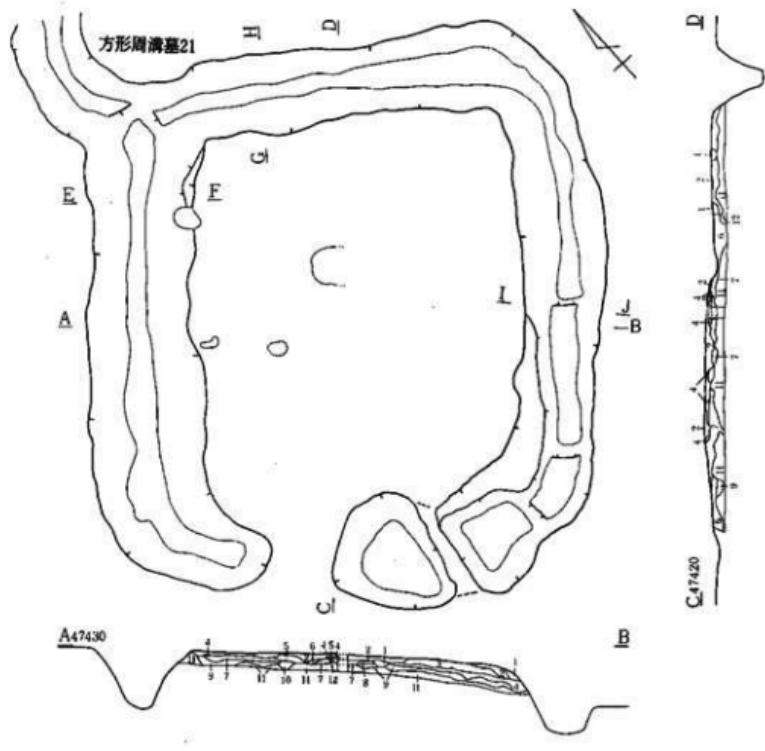
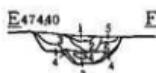
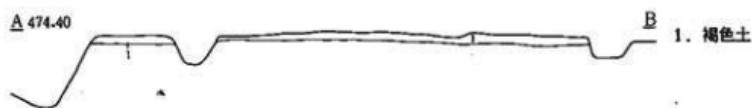
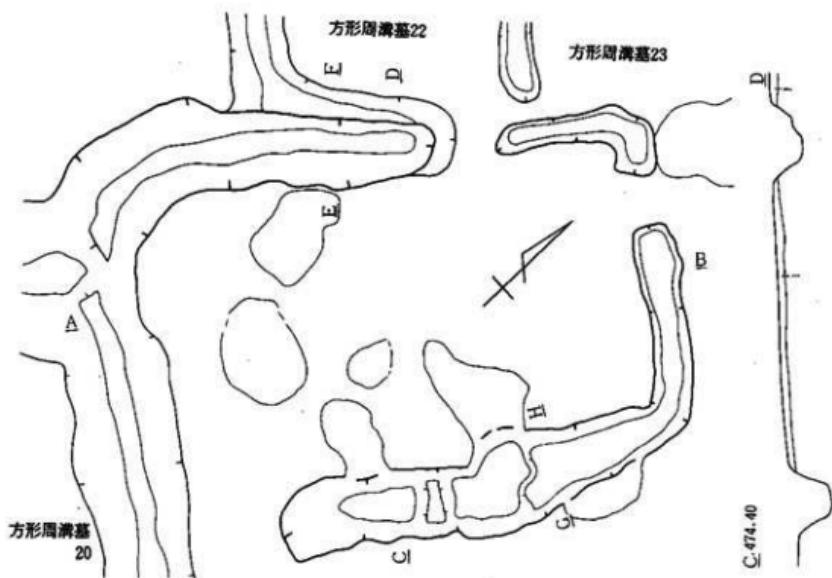


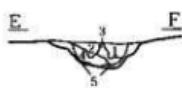
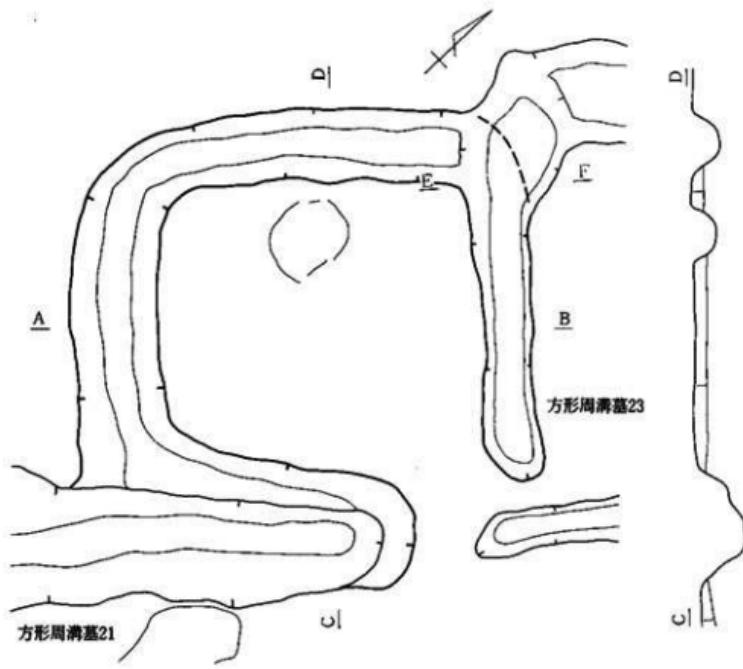
图5 方形周溝墓20



1. 漆黑土
2. 黑褐色土
3. 褐色土
4. 黄褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗黄褐色土

0 4 m

插图 6 方形周溝墓21



- 1. 黑色土
- 2. 黑褐色土
- 3. 褐色土
- 4. 暗黃褐色土
- 5. 黃褐色土

0 2m

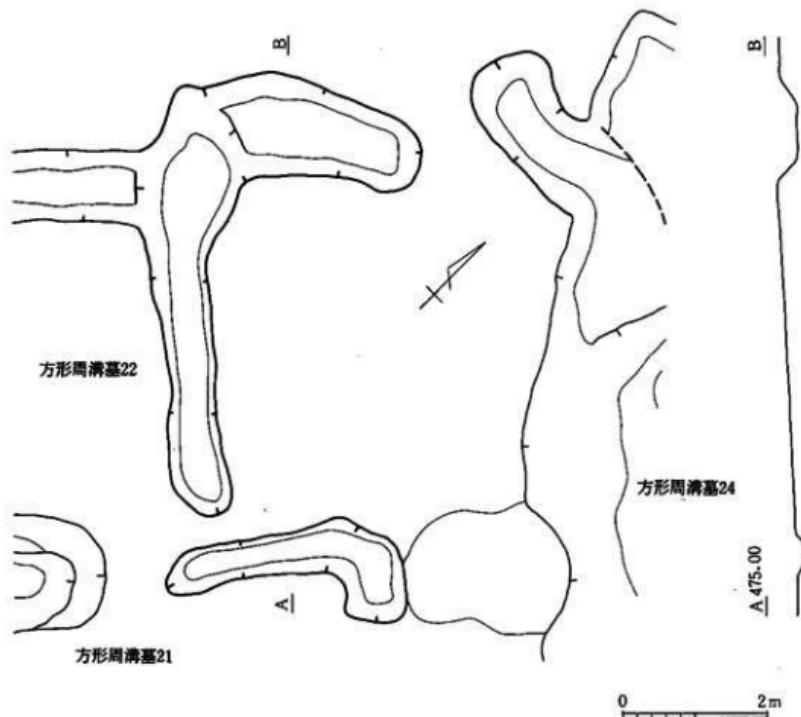
擇図7 方形周溝墓22

◇ 周溝墓23（挿図8）

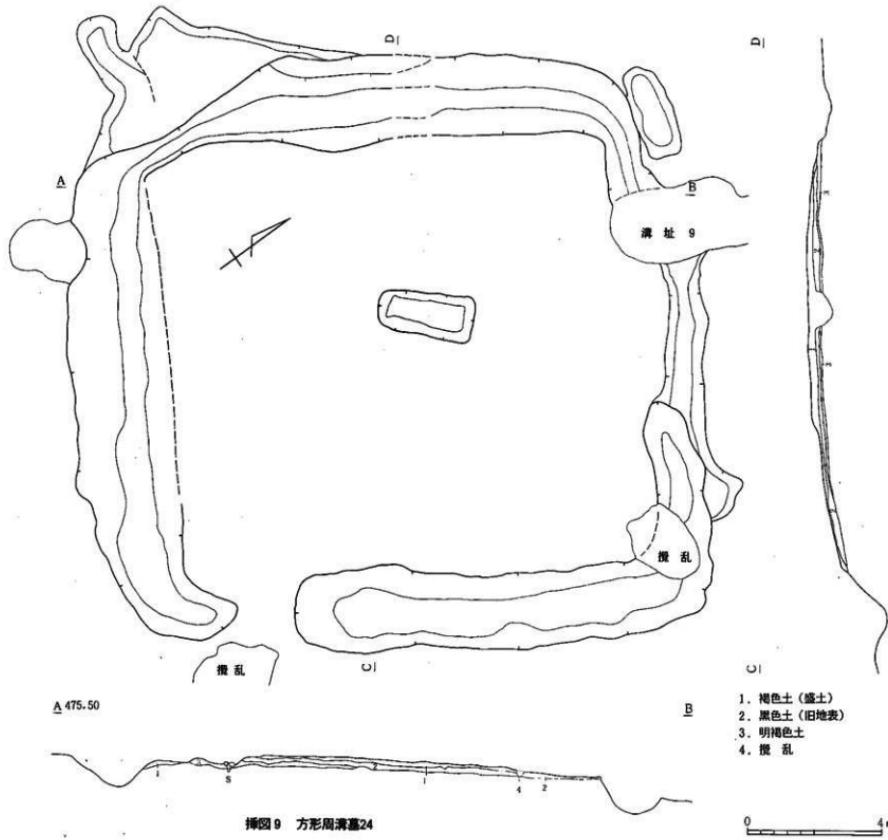
方形周溝墓22北側で検出、北東側の周溝は周溝墓24の周溝（妙見山古墳の周溝でもある。）と共有しており、北角には一部ではあるがこの周溝墓固有の周溝が見られる。西から南にかけての周溝は周溝墓22と共有している。さらに、南東では周溝墓21と共有している。規模は推定であるが $7 \times (9)m$ と見られる。入り口は北西の周溝の中央で周溝がとぎれている部分であろう。周溝は、北西側が幅は1.5mと広く、深さは20cmであるのに対し、周溝を共有する南西側は幅が狭く、掘り込みも深くなっている。主体部は確認できなかった。

遺物の出土はない。

（吉川）



挿図8 方形周溝墓23



◇ 方形周溝墓24（挿図9）

妙見山古墳の周溝を掘り下げているとき、古墳の盛土の下に周溝が続いていることがわかった。さらに古墳の盛土にトレーナーを開け盛土の状況を調べるうちに、古墳が築造された時期と見られる漆黒土の下にさらに褐色の土があり、その下がロームになることがわかったため、古墳の調査を先行した。

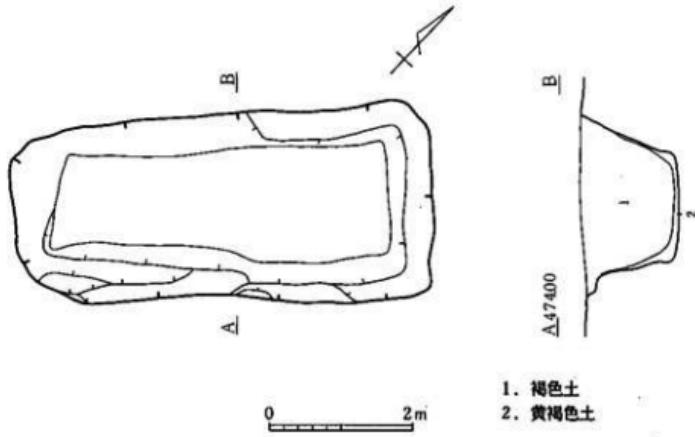
古墳の調査が終了した後、盛土を外して周溝を検出した。その結果19×17mの長方形の周溝墓であることがわかった。周溝墓の幅は南西側が最も広く3mを測る。あとはほぼ一定で約2mある。南西溝の幅が他のものより広いのは、妙見山古墳築造時に改修された可能性が高く、本来は他の部分の規模と同様であったと推測される。

深さは検出面から100～60cmを測る。北側では一部、溝址9に切られている。また、東角付近では擾乱があり、壁を切っている。北東の周溝は前述の擾乱からやや北側で二段になる。北にのびるものは約30cmの深さで溝9まで続いているが、そのほかの部分の周溝とはやや形状が異なっている。完全に盛土の下になっていた北西の周溝は底部が狭くなり、断面形でV字形になっている。この周溝墓は崖の斜面に構築されているため、南西の周溝は南に向かうにつれ多少浅くなる。南角付近で周溝がとぎれる。この部分が入り口と見られる。

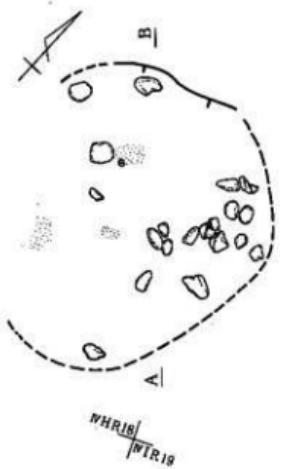
古墳の断面調査において、周溝に囲まれた部分で褐色土の落ち込みを確認した。盛土の排除の結果主体部であることがわかった。この主体部は2.7×1.2mの長方形で深さは140cmある。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが北西から南にかけての壁を除いては途中に陵をもつていているため2段に見える。底部は平坦であり、棺の形態等の詳細は把握できなかった。

この周溝墓に係わるとみられる遺物の出土はない。

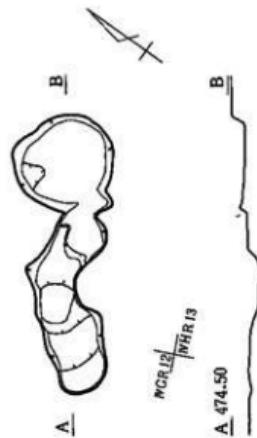
（吉川）



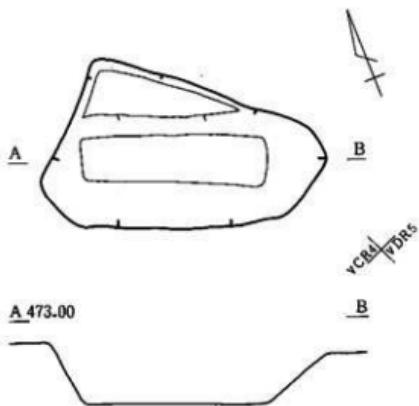
挿図10 方形周溝墓24主体部



堅穴 2



堅穴 3



堅穴 4

0 2m

擇図11 堅穴2、3、4

2. 壑 穴

◇ 壑穴2（押図10、第1図）

方形周溝墓20の西角の周溝上に焼土と石が検出されたため石のある範囲を壠穴とした。試掘トレンチにより西側が切られたため、規模ははっきりしないが、4mの円形と推定できる。深さは10cm弱とごく浅い。壁はほとんど残っていないが、北側に一部残っている箇所ではごく緩やかに立ち上がっている。

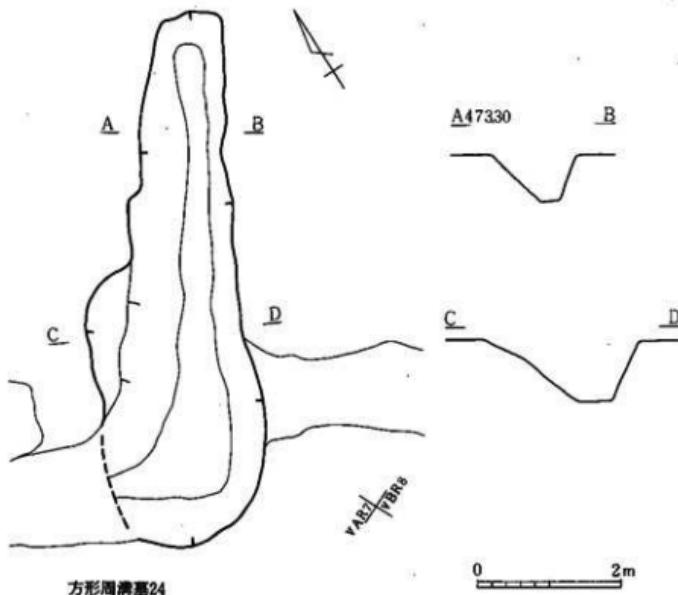
出土遺物としては、北側の壁際から素焼きの皿（いわゆる「かわらけ」）が出土しているのみである。（第1図10）遺物から中世と判断でき、焼土、炭の堆積状態から火葬墓の可能性もある。
(渋谷)

◇ 壑穴3（押図10）

方形周溝墓22の西約10mの所で焼土を検出した。一部に木の株があったため、完掘できなかつた。調査できた部分は、40×10cmの不定形である。深さは約20cmあり、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。

遺物の出土はなく、時期・性格とも不明である。

(渋谷)



◇ 穫穴4（押図10、第1図）

方形周溝墓24の北側は比較的傾斜が緩やかになる。この部分で周溝から北へ約6mのところに検出した。4×1.5mの長方形のもので、形態からみれば溝状址ともいえるが、ここでは竪穴とした。深さは約90cmで底部は平坦である。壁はほぼ垂直に掘られている。溝址9の方向とは直交する方向であり、さらには周溝墓24の周溝と平行であるため、周溝墓の可能性が残るもの、妙見山古墳の北斜面に入れた試掘トレンチには、それらしい遺構の存在は確認できなかった。

遺物としては、土師器の高壺の脚部が出土している。（第1図11）土器の時代は古墳時代であるが、遺構の時期は断定できない。また、性格も不明である。
(吉川)

3. 溝 址

◇ 溝址9（押図12）

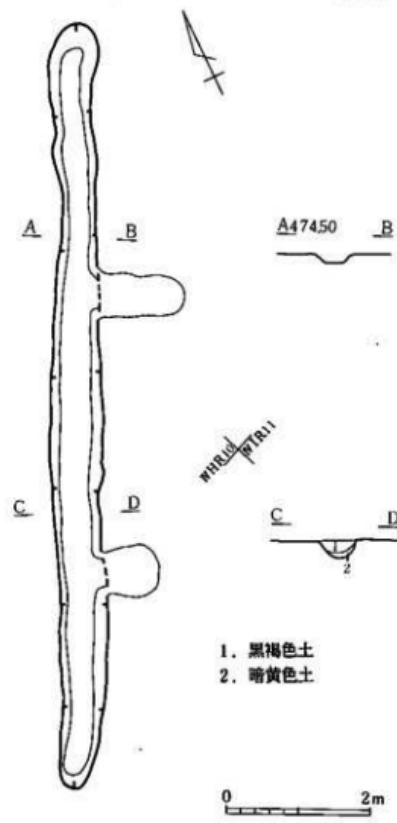
方形周溝墓24の北側の周溝を切って検出したものである。全長は7m、幅2mである。深さは約90cmあり、壁はほぼ垂直に掘られている。周溝墓24の溝を切るあたりでやや西へ曲がっている。溝というよりも周溝のような形態をしているが、対応するものがなければ溝址とした。

遺物の出土はなく、時期・性格とも不明である。
(馬場)

◇ 溝址11（押図13）

調査区の西隅で検出した、長さ10.5m、幅0.6mの溝である。深さは15cm前後で壁は比較的急角度に掘り込まれている。方向はほぼ南北方向であり、南の端は試掘トレンチにより切られている。水の流れた様子はなく、なんらかの区画を意とした溝の可能性がある。

旧道路が用地境となるわけであるが、この道は山の斜面を少し庇めたものとみえ、妙見山古墳の北西部が掘削状になり、一段下の段丘面へつながっていく。この溝の方向と旧道の方向はほぼ一致している。



押図13 溝 址 11

遺物の出土がないため、時期は不明である。

(渋谷)

4. その他の遺構

1) 集 石

集石 2・3 (挿図14、第1図)

妙見山古墳の西側で盛土の調査を実施しているときに、盛土裾付近で挙大の石をいくつか確認した。当初は葺石とも考えたがその石が盛土の下からも確認できたため、盛土を排除したところ古墳の下で確認した方形周溝墓の掘り方まで 7×3 m の範囲で敷き詰められたよう検出したため集石 3とした。また、方形周溝墓 23 の入り口付近でも同様の石が 3×1.5 m の範囲で確認できたため、集石 2とした。石材としては花崗岩がほとんどであった。

遺物としては、波状文を施した壺の破片が出土している。(第1図12) 弥生時代後期の遺物であり、この集石の時代とさほど差はないものと考えられる。

(吉川)

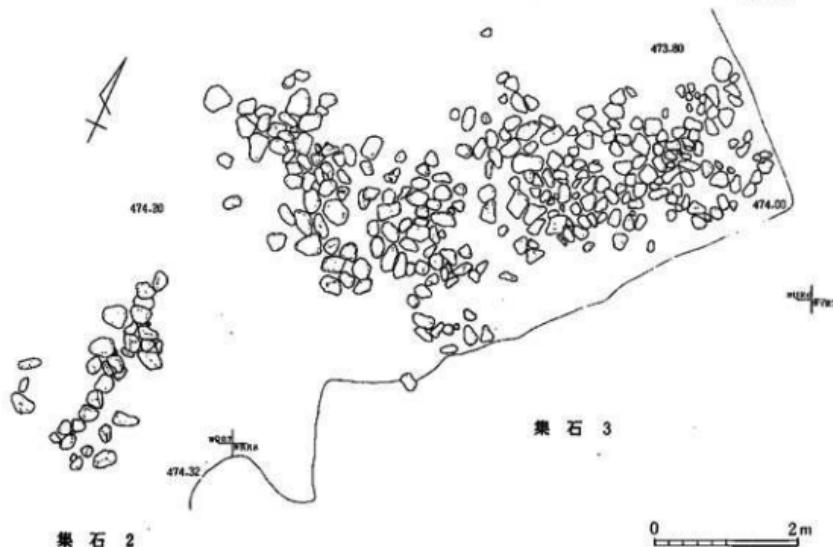
2) 柱穴群

柱穴群 (挿図15~17)

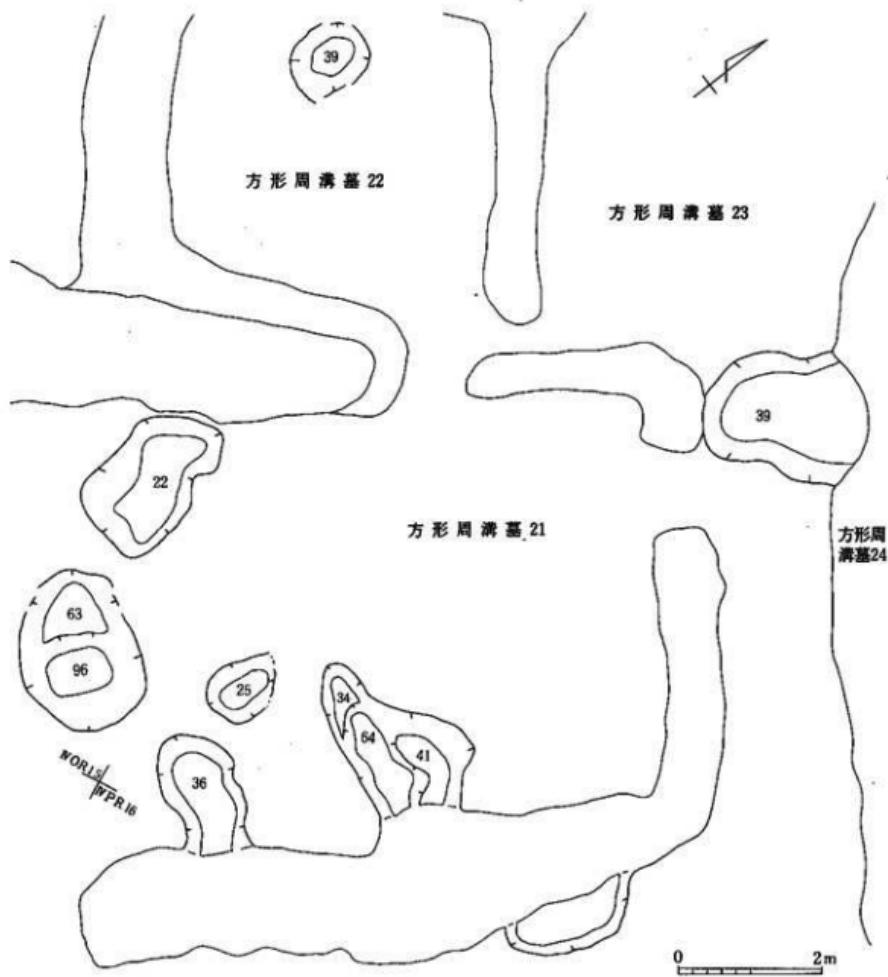
周溝墓 21 の内部でいくつかの柱穴を検出し、調査したが、規模・深さ・平面形等に統一制が見られず、建物址とは考えられない。中には木の根による擾乱もあるものと見られる。

いずれも遺物の出土もなく、時期・性格等は不明である。

(吉川)



挿図14 集石 2・3

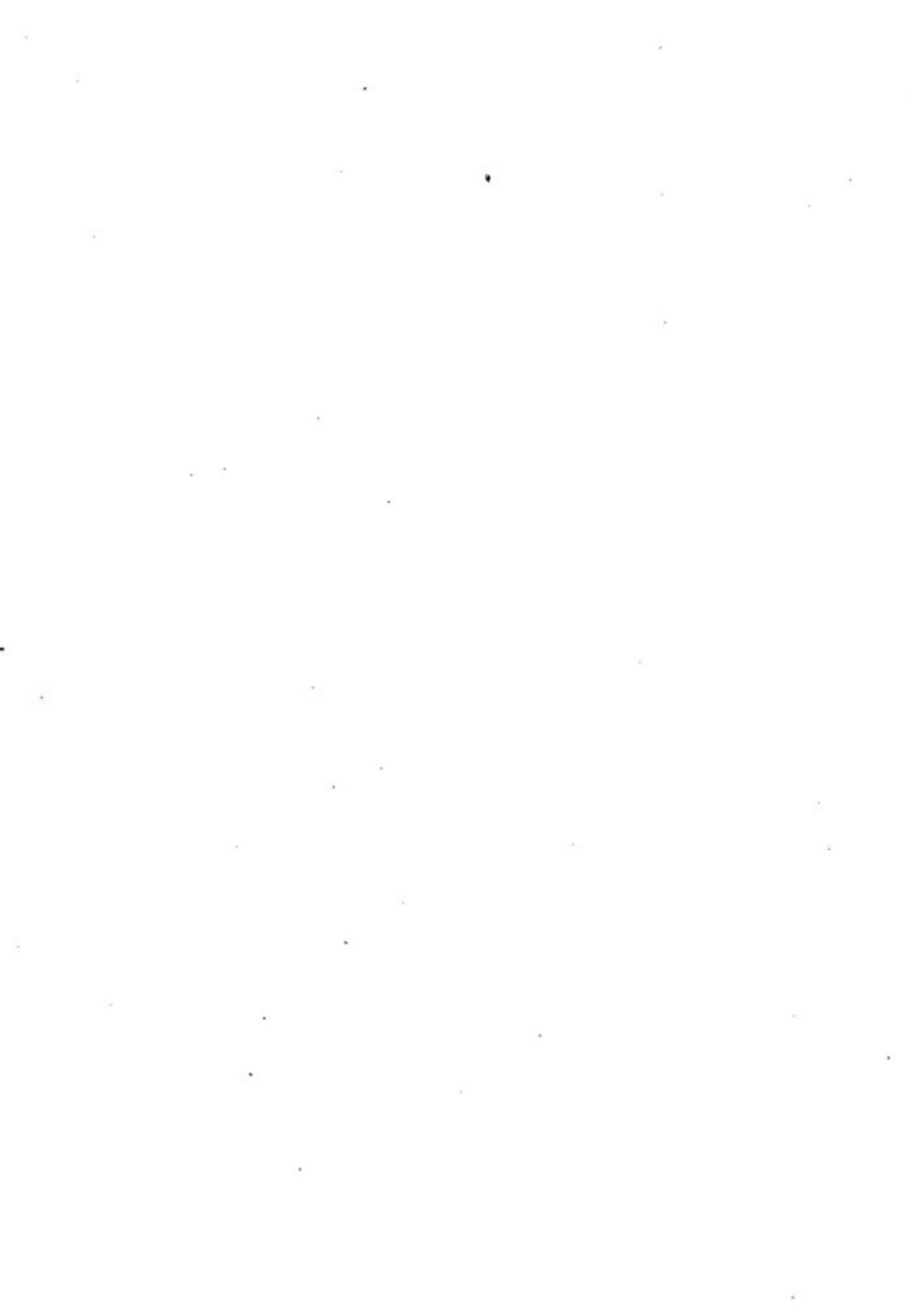


挿図15 柱穴群（その1）

5. 遺構外遺物（第3図）

今回の調査では遺物の出土は少なかった。そのうちでも、遺構に関係しないものはほとんどない。

第3図1～6は打製石斧である。石材は硬砂岩を中心である。7・8は方形周溝墓20付近で出土した縄文時代前期の土器片である。9もやはり方形周溝墓20付近で出土した須恵器の壊であり、高台がついている。さらに10は近世の摺鉢の破片である。 （吉川）



妙見山古墳（付図18）

1) 墓丘及び周溝

妙見山の北東端の段丘崖に少し盛り上がった場所がある。南西側は八幡原の段丘面と一続きになっているが、南から東にかけての崖は急傾斜面になっている。また、北東側も崖の斜面になるが、一部にテラス状に平坦な箇所を持つ部分がある。北から西にかけては旧道路が通過していたため、いわゆる掘り割り状に産んでいる。

この古墳の形態は当初周溝が確認されたことにより19×14mの範囲に盛り土を施した長方形墳であると判明した。しかし古墳の規模は北西の墳丘端部で旧道路の擾乱により破壊されており、南東側も段丘崖の傾斜部分にあたりは、はっきりしないため、22×19mと推測することができる。墳丘の残存状態及び墳丘断面観察状況から判断すれば、一辺が12mの方墳とするのが妥当ともいえる。調査前の測量では墳頂の標高は475.80mであった。また、南西側の段丘平坦面は標高474.50mであり、墳頂部との比高差は1.3mを測り、墳丘高は1.3mあるといえる。

なお、方形周溝墓24とその位置がかなり重複する部分があり、本墳築造において、強い関連のあったことも想定される。方形周溝墓24の周溝検出時にあまり掘り込みの深くない溝と重複する部分がありこれらが本墳の周溝であった可能性もある。また、南東側の周溝は他に比べ幅が広く、本来の周溝墓の溝であったものを古墳築造時に改修していることも考えられる。

以上調査結果から本墳の形状を概推すれば一辺が12m四方の方墳であり、周溝・蓋石等を有しないものといえる。

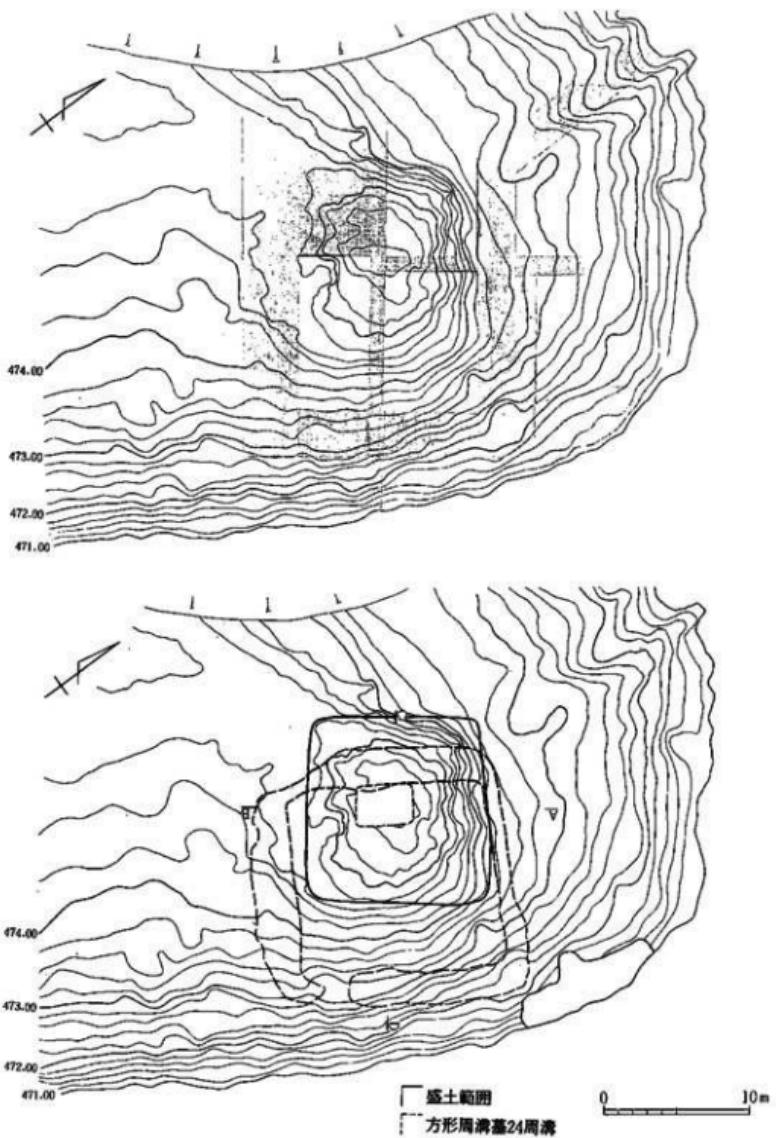
周溝からは、打製石斧、横刃形石器の石器類が出土しているが、いずれも周溝墓の周溝からである。

（吉川）

2) 盛土（付図1）

墳丘上に断面観察用のベルトを残しながら調査をすすめた。ベルトはほぼ南北および東西方向の二本とした。

断面観察により、下層にある漆黒色の土が、隣地のバイパス用地で調査した方形周溝墓11の断面で確認したものと同じであることがわかった。この漆黒色土は、方形周溝墓24の盛土である褐色土の下部にはば一定の厚さで堆積している。したがって、周溝墓構築当時の表土であったと見られる。古墳の盛土はこの周溝墓の盛土（褐色土）を平坦にしたのち、その上にブロック状に固められた土を細かく積み重ね、墳丘としたものと見られる。このことは墳丘構築にあたり、いわゆる版築工法によっているといえ、一定の高さを有する墳丘の構造を意識しているものであり、他の周溝墓等の低墳丘墓とは、その形態等様々な点で大きな差を持つ高い墳丘を造ることに、意味をもつ古墳であるといえる。盛土の量は一番高く盛られた場所で、周溝墓の



插図16 妙見山古墳発掘箇所及び妙見山古墳位置

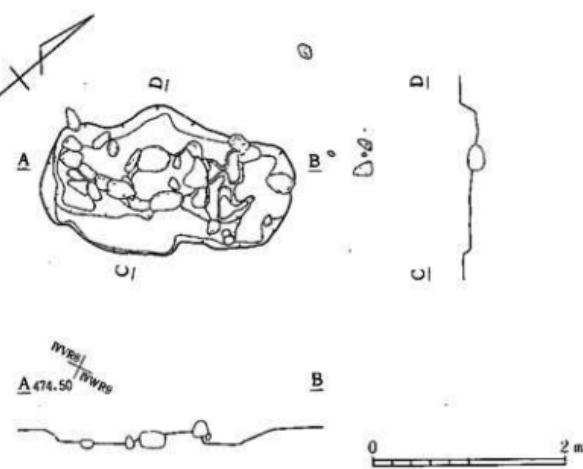
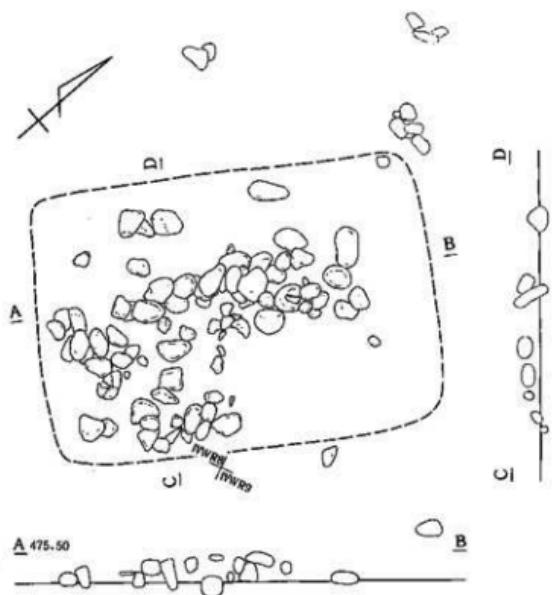


插图17 妙见山古墳主体部

周溝墓の盛土の上から110cmほどある。

盛土の中からは、石器と、須恵器の甕、壺の破片が出土した。

(佐合)

3) 主体部(挿図19)

墳頂部に石を伴う長方形の掘り込みがあった。石の範囲は 3×2 mであり、掘り下げるにしたがって、石の数は多くなった。しかし、一部木の根による攢乱があり、また、近年の盗掘坑と判断される直徑1.5m程の穴があり、墳頂部付近の残存状態はきわめて不良である。石は原位置をとどめるものはほとんどないが、本来人為的に置かれたものと判断でき、内部主体を構成した可能性がある。石をすべてはずした掘り上がりは 2.6×1.6 mの不定形ではあるが、梢円形に近い。この部分の深さは16cmほどあり、底部は凸凹になっている。主体部の痕跡と考えたが、それを証明する遺物や、埋葬主体を示す痕跡は認められなかったが、墳頂部からなんらかの形で埋葬したものと推測される。

(馬場)

4) 築造時期

本墳の構築時期については、内部主体そのものが不明確であり直接関連すると判断される出土遺物も皆無に近い状態であり、具体的に確定することは困難である。

しかし、本墳は方形周溝墓直上に築造されており、それよりは新しい時期であることは判断できる。また、下部に所在する方形周溝墓の溝を共有している可能性も考えられ、時期的にあまり隔たりのない時期の構築といえる。

また、近隣するバイパス用地内を含め、24基の方形周溝墓が確認されており、それらの構築時期が4世紀末から5世紀半ばの間と捉えられ、それらの構築時期のうち、後半期もしくは最終段階に構築されたものと考えられる。

(小林)

IV ま と め

今回の調査地点は、八幡原段丘面のうち東方段丘崖上の北端部分である。段丘東端の段丘崖上には、併行して実施した一般国道153号飯田バイパス用地内の調査結果と合わせて、24基の方形周溝墓が検出された。

今回の調査箇所は、段丘縁の北端部に限定され、妙見山古墳1基と方形周溝墓6基が検出されたわけであるが、いずれも前述の方形周溝墓と一連のものといえる。

段丘端部に連続して複数検出された方形周溝墓群の築造時期については、バイパス用地内で検出されたいいくつかの方形周溝墓から出土した遺物により、4世紀後半から5世紀半ばまでの間であることが明らかになっており、本調査によるものも同時期の所産といえる。

しかし、それぞれの周溝墓については、出土遺物がほとんど無く、具体的な築造時期を特定することは困難である。ただ、妙見山古墳が方形周溝墓24の上部に構築されていること、いくつかの周溝墓の溝が重複していることなど、互いの前後関係はある程度把握可能といえる。

また、今回の調査範囲は段丘東北端部に限られたものであり、隣接地で確認された方形周溝墓群を含め総合的な検討をすることが不可欠なことはいうまでもないが、それは当地方における古墳時代研究に大きな課題となるものであり、後日に譲るものとし、本書はそのための部分的な基礎資料提示の場として、若干の問題を提起し、まとめとしたい。

八幡原遺跡の墳墓について

段丘端部に築造された24基の方形周溝墓（本調査では6基）をはじめとする墳墓群は、4世紀から5世紀にかけての特定集団の墓域であり、それは、東方の下位段丘面上に集落を開拓した人々のものと考えられる。しかし、この時期は当地方における古墳築造開始と考えられ、そうした古墳被葬者と本墳墓群被葬者との階層的な相違点等様々な観点から検討する要がある。

また、段丘端部に多数の墳墓群を検出した今回の調査結果は、下位段丘上の集落と上位段丘上の墓域とが有機的な姿であったことを強くうかがわせる。当地方の同様地形箇所において周溝墓の検出された例がいくつもある。しかし、それらは遺跡のごく一部を調査した場合がほとんどであり、段丘端部全体の状況を把握し得たものは無い。しかし、今回の八幡原遺跡の調査結果により、同地形で同様の土地利用のあったことを考究することも可能であり、本地方における地形的な生活環境の中で、一定の時代と階層において、墓域が居住域より上位の段丘上に構築されている可能性が強いといえ、今後の発掘調査等に重要な指針を与えたといえる。

妙見山古墳について

方形周溝墓の直上にあまり時を経ないで古墳が築造されており、その関連が明らかにされるな

らば、当地方の古墳研究そのものに大きな意味を持つ。

また、他の墳墓がほとんど墳丘を有しないのに対し、本墳1基のみが、墳丘を有することに何らかの意味を見出すべきといえ、かつ、一連の墳墓群の中でも特別の意味を持つことを検討する必要がある。

さらに、本墳は一辺12mとあまり規模は大きくないが、当地方においては具体的に明らかにされた方墳としての初見であり、当地方に約700基ある古墳の中での位置付け等今後の古墳研究に様々な問題を投げかけている。

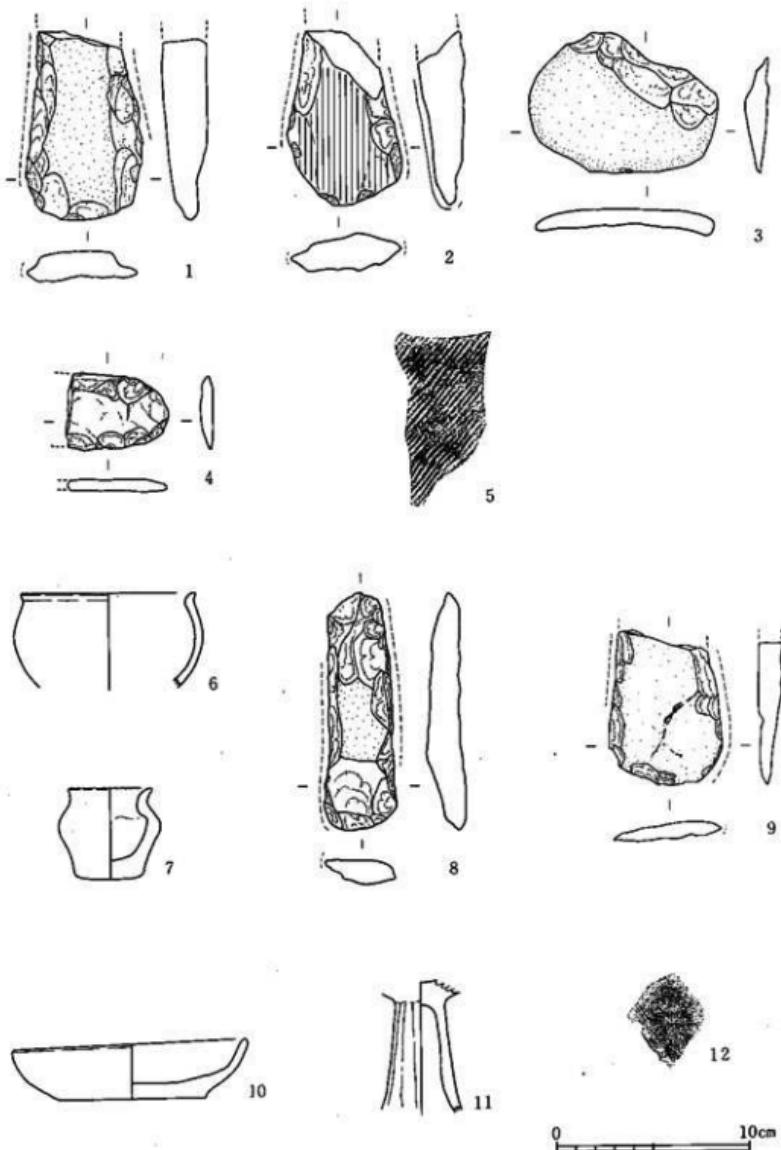
以上、本調査結果により明らかにされた具体的な事象及びそれらから派生する古墳時代の土地利用形態の一端を推測する契機となることを記した。また、様々な観点において本遺跡の重要さが示されたことも事実であり、本書の刊行により、当地方の古墳時代研究において新たな方向も示されたといえる。

(小林)

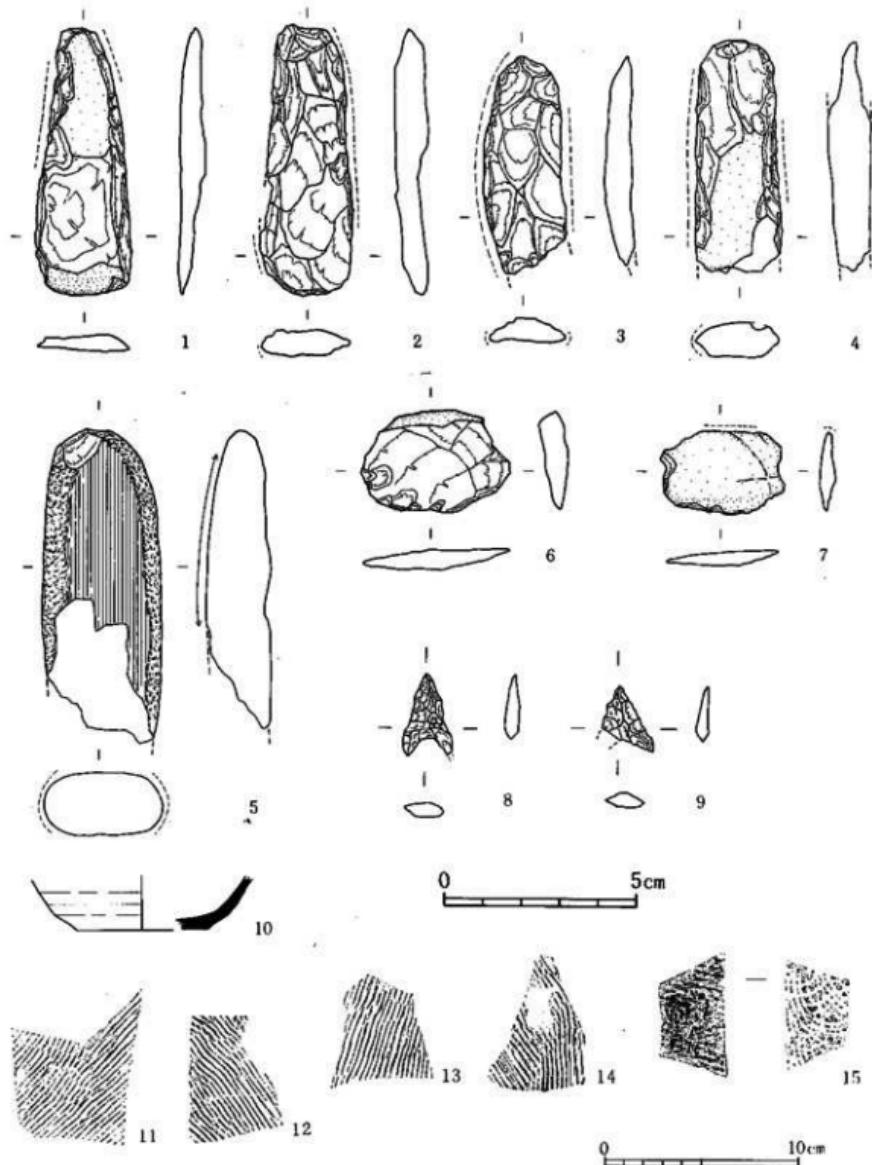
引用参考文献

- 飯田市教育委員会 1973『妙前大塚（3号）古墳』
中央道遺跡調査会 1975『中央道調査報告－下伊那郡鼎町その2－』長野県教育委員会
鼎町教育委員会 1975『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』
飯田市教育委員会 1980『猿小場遺跡』
鼎町教育委員会 1983『矢高原・八幡原遺跡』
鼎町教育委員会 1984『鼎町黒河内遺跡』
鼎町教育委員会 1984『鼎町一色・天伯B遺跡』
飯田市教育委員会 1985『日向田遺跡』
飯田市教育委員会 1988『田井座遺跡』
飯田市教育委員会 1990『日向田遺跡II』
飯田市教育委員会 1989『六反畠遺跡』
飯田市教育委員会 1991『田井座・一色・名古熊下遺跡』
下伊那史編纂委員会 1991『下伊那史 第1巻』
下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第2巻』
下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第3巻』
下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第4巻』
日本古代文化研究 1984『古墳時代の鉄刀について』白井 熊
鼎町史編纂委員会 1986『鼎町史』
長野県教育委員会・更埴市教育委員会 1987『土口将軍塚』重要遺跡確認緊急調査
長野市教育委員会 1988『地附山古墳群』
飯田市教育委員会 1989『物見塚古墳現地見学会資料』
飯田市教育委員会 1991『柳添遺跡現地見学会資料』
飯田市教育委員会 1991『八幡原遺跡現地見学会資料』
飯田市教育委員会 1991『城遺跡』
飯田市教育委員会 1991『清水遺跡』
宇治市教育委員会 1991『宇治二子山古墳』発掘調査報告

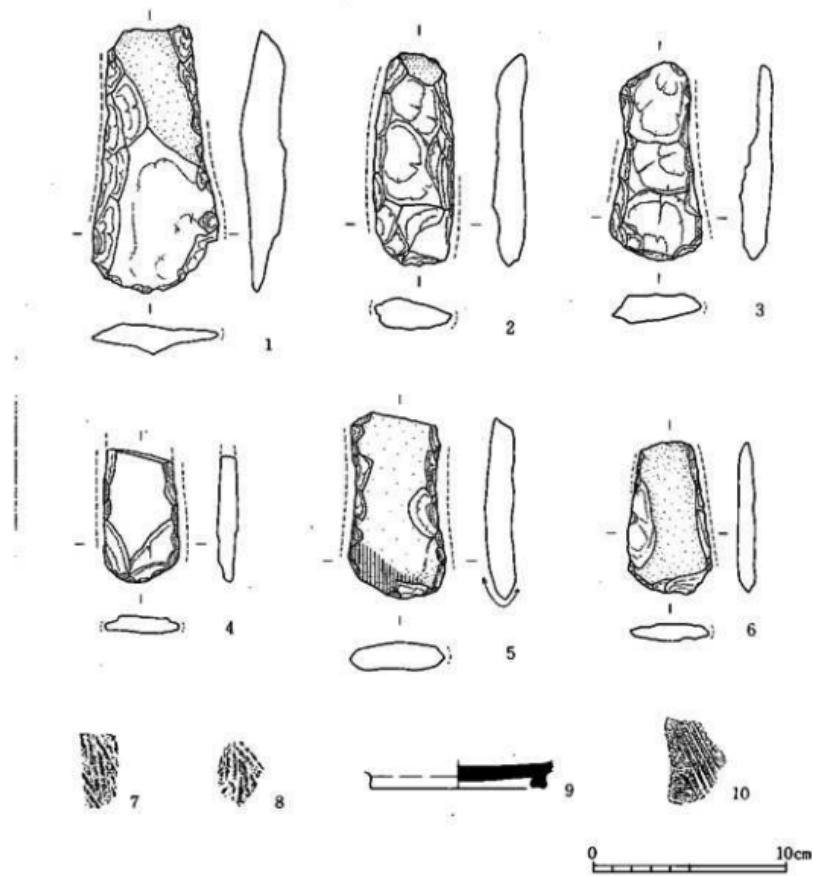
図 版



第1図 八幡原遺跡出土遺物 (1~5 方形周溝墓20, 6~8 方形周溝墓22
9 方形周溝墓23, 10 窪穴2, 11 窪穴4, 12 集石3)



第2図 妙見山古墳出土遺物 (1, 2, 4, 7, 8 周溝出土
(3, 5, 6, 9, 10, 11~15 盛土出土)



第3図 八幡原遺跡出土遺物（1～10 遺構外）

写真図版

图版 1



方形周溝墓群



方形周溝墓19



方形周溝墓20

图版 2



方形周溝墓22



方形周溝墓23



方形周溝墓24主体部



堅穴 4



集石 3

図版4



調査前の妙見山古墳



南北方向の盛土の様子



東西方向の盛土の様子

妙見山古墳
埴頂部で検出した
長方形のおちこみ

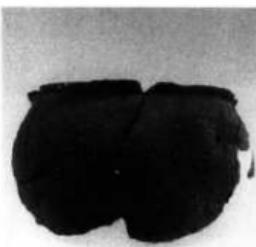


おちこみの
中にある石



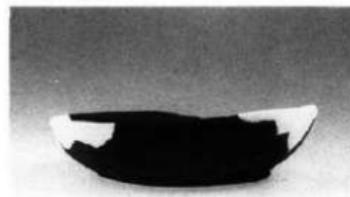
図版 6

方形周溝墓20出土遺物



方形周溝墓22出土遺物

堅穴 2

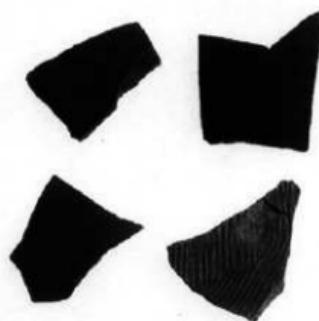


堅穴 4



造構外出土遺物

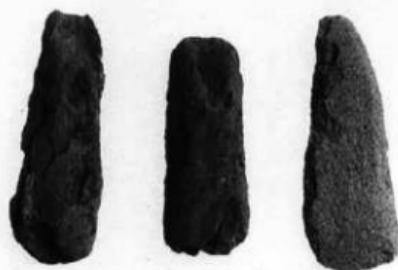
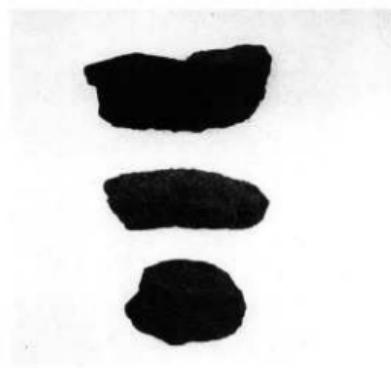
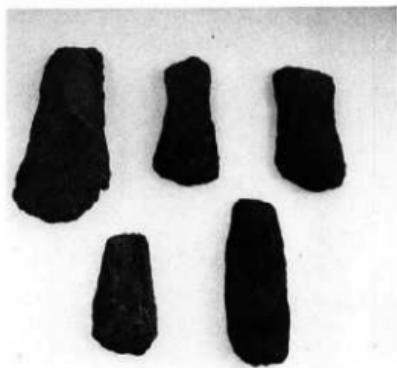
妙見山古墳出土遺物



盛土内出土

須恵器

石 器



周溝内出土石器

図版 8

作業風景
(方形周溝墓20)



作業風景
(妙見山古墳周溝)



作業風景
(方形周溝墓24主体部)



八幡原遺跡

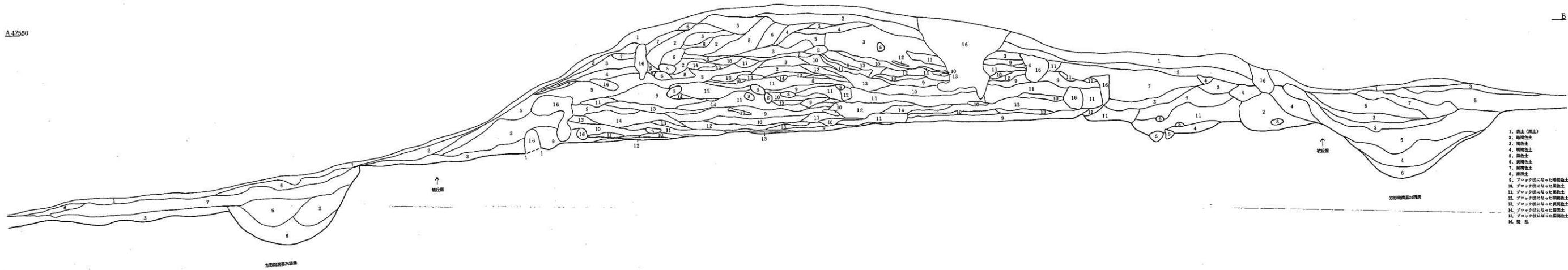
事務所兼住宅建設に先立つ
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月 印刷

1992年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会
印 刷 株式会社秀文社

A4750



C4750

